

デジタルカメラの肝



たくき よしみつ

3

食べ物を撮るときの一工夫

同じ村に住む元大工さんが、好きな釣りを生かして「川魚料理」の店を開きました。これは店主が川で釣った天然物の岩魚の唐揚げがのった岩魚丼（680円）。

旅行の途中で食べたものを記念に撮っておくとよい思い出になります。でも、後から見るとあまりおいしそうに見えないことがありますよね。料理専門の写真家のように撮るのは無理としても、ちょっとした工夫でおいしそうに撮れるものです。

まず、器が画面からはみだすくらい「大きく写す」こと。普通に撮ると近すぎてピントが合わない場合は、マクロモードに切り替えましょう。

もうひとつは、間違っても色が青っぽくならないことです。前にも書いたように、ホワイトバランスを「曇り」モードにすると赤味が濃くなって、ぐっとおいしそうに見えたりします。



KONICA MINOLTA DiIMAGE A200

1/5秒、F 2.8 ISO 200

露出補正-2/3

7.60 mm (29 mm相当)

花火の写真を撮るときのキモ

2004年8月21日に新潟県小千谷市の夏祭りで撮った花火です。

この2か月後、小千谷市周辺は震度7という地震に見舞われ、隣の川口町にあった私の家も全壊しました。それだけに、今見ると、感慨ひとしおです。

さて、花火の写真は、露出とシャッターを押すタイミングが難しいですね。

カメラのファインダーやモニターを覗きっぱなしでは、せっかくの生の花火が楽しめませんから、いっそ、小型三脚などにカメラを固定し、ピントも手動で合わせた後は、生の花火を見ながらシャッターを押せばいいでしょう。リモコンでシャッターが切れるカメラもありますから、それを利用すると、よりスマートです。

花火が打ち上がる位置は決まっているので、オートフォーカスで撮る必要はないのです。



NIKON D70+ニッコールAF50mm/F1.4

1/125 秒、F1.4、絞り優先モード

50mm (75mm相当)

彩度を上げて色味を強調する

池のそばで、タゴガエルとシュレーゲルアオガエルが道ならぬ恋に落ちているところをパチリ。

こういうのを「異種包摂（いしゅほうせつ）」というそうですが、異種包摂の中でもかなり珍しい図ではないかと思います。

さて、撮った写真がなんとなくねぼけた色になっていると感じたことはありませんか？

最近のデジカメは画素数を欲張りすぎて、色再現能力が弱くなっています。ケータイの内蔵カメラで撮った写真なども、必ず色が薄くなりますね。

そんなときは、画像ソフトで「彩度」を上げて色味を強調してやると見栄えがよくなります。彩度の調整はたいていの画像ソフトで簡単にできます。

この写真も、カエルの色の違いをはっきり見せるため、多少彩度をあげてみました。

しかし、この二匹の恋の行方は……。犬のように、雑種が生まれるというわけにはいかないところが残念です。



KONICA MINOLTA DiMAGE A200

1/20 秒、F3.5 ISO 200

露出補正 -2/3

50.80 mm (200 mm相当)

24 背景がぼけると雰囲気が出る

背景がぼけると雰囲気が出る 川内村の高田島地区に伝わる獅子舞と、それを見守る人たちです。

この写真では、観衆が適度にぼけているのがポイント。それによって、手前の主役である獅子が際だって見えます。

しかし、デジカメにとって、背景をぼかすことは大の苦手。撮像素子（CCDやCMOS＝従来のフィルムに相当する部分）の面積が小さいため、フィルムカメラよりレンズの焦点距離が短くなり、ピントの合う範囲（被写界深度）が深くなるからです。構造上の宿命なのですね。

少しでも背景をぼかした写真を撮るためには、望遠ズームを使います。人物の写真などは、必ずズームの望遠側で撮る習慣をつけておきましょう。

主役に近づき、背景との距離差をつければ、さらに背景がぼけてくれます。



NIKON D70+タムロン18-250mm/F3.5-6.3

1/800秒、F5.6

絞り優先モード 露出補正 -1/3

42.00 mm (63 mm相当)

1台で何でも撮れる中級デジカメの魅力

近所に「ツリーハウス」ができたというので見に行きました。屋根から木の枝がニョキニョキ出ているのが楽しいですね。

さて、今はデジタル一眼レフブームですが、この写真はデジタル一眼ではなく、レンズ一体型カメラで撮っています（コニカミノルタ DiMAGE A200）。35mmフィルム換算で28-200mmという使いやすいズーム。レンズの明るさはF2.8-3.5。多くの状況でよい写真が撮れます。

このカメラは、残念ながらメーカーがカメラ製造から撤退したため絶版ですが、今はもっと進化した、魅力的なモデルがいくつか出ています。

コンパクト機では超望遠撮影などは無理ですし、一眼レフは持ち歩くのが大変。今こそ「中級機」を見直してもよいと思うのですが、中級機はほとんど絶滅危惧種になってしまいました。残念なことです。



KONICA MINOLTA DiMAGE A200
1/200 秒、F3.5、絞り優先モード
29.50 mm (114 mm相当)

フリーソフトでサクッと直す

今週は猿原人村（川内村）で撮ったこんな写真。この猫は一体何をしたいんでしょうね。

毎回、ここに載せる写真は必ず画像ソフトで修整しています。直さないまま使える写真はほとんどない、くらいに思っています。

で、画像ソフトは何がいいですか、という質問をよくいただきます。

私がよく使うのはIrfanViewというフリーソフトです。イルファン・スキルジャンさんというオーストリアの学生さん（発表当時）が作ったソフトですが、操作性がすばらしく、トリミング、明暗補整、シャープフィルタ（くっきりさせる）といった基本作業があっという間にできます。

IrfanViewの日本語版も出ていますので、ぜひ一度使ってみてください。



PENTAX K100D+シグマ30mm/F1.4

1/200 秒、F4

露出補正 -1/3 30mm (45 mm相当)

一眼レフなら暗いところでも撮れる？

「滝桜」で有名な福島県三春町にある隠れ家的喫茶店「碧（あお）い月」のオーナー・ほしゆきえさんの朗読会です。

ろうそく1本の暗い室内で行われるのですが、こういう状況では当然フラッシュをたくわけにもいかず、ひたすら「明るいレンズ」に頼るしかありません。

何台もカメラを持っていき試しましたが、F2.0でも無理でした。

シグマのF1.4/30mmという、デジタル一眼レフ専用レンズとしては最も明るいレンズ（単焦点レンズ）を使い、ようやくこの程度に撮れました（写真1と3）。

写真2は、フィルム一眼レフ用の単焦点レンズ（50mm/F1.4）を使っています。

一眼レフはレンズ交換ができるのが強み。ただし、一般にセット販売されているF3.5-5.6程度のレンズでは、レンズ一体型中級機より暗いので、明るい室内撮影でもフラッシュなしではまず厳しいでしょう。

室内写真をメインに考えているなら、必ず明るいレンズと一緒に購入する計画も立てないといけません。

明るいレンズは高価です。レンズのほうがカメラ本体より高かったりします。

写真1：



写真2：



写

真3：



1 :

PENTAX K100D+シグマ30mm/F1.4

1/25 秒、F1.4、ISO 200

露出補正 -2/3

2 :

NIKON D70+ニッコール50mm/F1.4

1/30 秒、F1.4、露出補正 -2/3

3 :

PENTAX K100D+シグマ30mm/F1.4

1/30 秒、F1.4、ISO 200

露出補正 -2/3

動くものの連写はやはり一眼レフ

この連載で、私はよく「一眼レフは万能ではない」と書いているので、「たくきはアンチ一眼レフか」と思われているかもしれませんが、そんなことはありません。一眼レフはやはり素晴らしいのですが、長所と欠点をしっかり把握しましょうということです。

一眼レフ最大の長所は、連写性能でしょう。オートフォーカスの速さ、連写の速さは、レンズ一体型デジカメの比ではありません。スポーツカメラマンが一眼レフ以外で撮影することなど到底考えられません。

この写真のように動く被写体を追いながらシャッターを押す場合は、一眼レフの圧倒的な力を思い知ることになります。

子供の運動会などには、望遠レンズをつけた一眼レフを持っていきたいものです。

欠点は、重いこと、シャッター音が消せないなので静かな場所では使えないことなどです。



NIKON D70+ニッコール85mm/F1.8

1/1000 秒、F2.0、露出補正 -1/3

※ D70の85mmは127mm相当

オートフォーカスが合いにくいときは

花の写真はマクロ（接写）で撮ろうということは以前に書きましたが、被写体が小さいと、オートフォーカスではピントが合わないことがよくあります。こんなときはマニュアル（手動）フォーカスに切り替えればいいのですが、私のように近視&老眼でそれも難しい場合、こんな風に、被写体の横に自分の手などを添えて、目標物の面積を広げてやると、オートフォーカスが合いやすくなります。これはツリガネニンジンという1cmほどの小さな花を、レンズ一体型デジカメでマクロ撮影しているところです。ピントがあったら、シャッターを半押ししたままフォーカスをロックし、添えた指はどけてから、花だけを撮影します。



撮影した写真↓



小動物をフラッシュを使って撮る

この連載では、今まで何度も「フラッシュは極力使うな」ということを言ってきました。特に室内で人物を撮るときは、カメラの内蔵フラッシュをたくと、美人も台なしになります。

しかし、フラッシュを使うことで面白い写真になる例もいくつかあります。私の経験では、窓ガラスに集まってくる蛾やカエルなど、小動物をフラッシュをたいて撮ると、迫力のある写真になります。

人物だと、肌が光って平板な写真になるのですが、小動物はフラッシュによって体表の質感がくっきりすることが、よい結果につながるのでしょうか。

これは虫を食べに来たニホンアマガエル。吸盤の質感までしっかり伝わってきますね。



KONICA MINOLTA DiMAGE A200

1/200 秒、F3.5、ISO 50

露出補正 -1/3

フラッシュ強制発光

50.80 mm (200mm相当) 望遠マクロモード